国際経済協力セミナー第 23 回

外大生が国際機関インターンから得られるものはなにか？
―インターン派遣から戻った院生の生報告―

講演者：曽我 太一氏　牛島 千晶氏　陳 穎氏　田中 大一氏　楊 殿閣氏

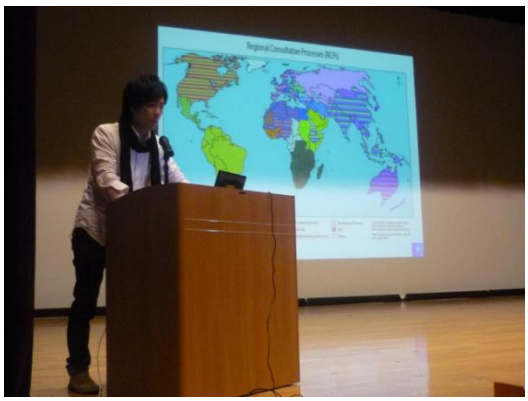
文責：永井哲平

草案作成：目崎銀兵 小山森生 田口晴三

小野崎慈慶 越田真奈実 杉岡紫朋

山本奈津実 平塚大地 小池優佳

山本唯 坂本浩羽 瀬脇理



講演者：曽我 太一氏
派遣期間：2010 年 3 月 31 日～9 月 24 日
延長期間：2010 年 9 月 25 日～10 月 30 日
派遣先：国際移住機関（IOM）

曽我太一氏は、IOM（国際移住機関）において 7 ヵ月間のインターンシップを行った。同氏の講演では、まず IOM の経歴や業務、目的についての説明が行われ、その後インターンシップを通して得たものについての話がなされた。また、インターンシップを行うなかで、様々な部門の人々から講演を受ける機会があり、移民の現状についての知識を得つつ、日本人職員の方々や、別の国際機関の職員との間に、幅広い人脈を形成することができたとも語っていた。

１．IOM とは

欧州からラテンアメリカ諸国への移住の支援を扱っていた ICEM（欧州移住政府間委員会）がその前身であり、1989 年に現在の名称となった。IOM は、移住問題についての理解を進めるとともに、それにより、社会的・経済的発展を促進させ、移住民の尊厳と安寧を支えることを目的とする機関である。127 ヶ国からの人々が参加しており、日本は 1993 年から参加している。本部はスイスのジュネーブにあり、464 ヶ所のフィールドオフィスを持つ。IOM の実際の業務の中心となるのは、主にフィールドオフィスである。2011 年 3 月 11 日の東日本大震災後においても、日本からの帰国をのぞむ外国人のための支援活動を行った。

２．取り組んだ業務内容

RCPs（Regional Consultative Processes）に関してのデータをウェブサイトにアップし、また、どの国がどの RCPs に属しているのかを示す地図を新たに作製した。その他に、移住民の移住国への順応の確認など、様々な事務的業務を行った。

３．インターンシップを通して達成できたこと

まず、言語能力を向上することができた。特に、移住に関しては専門的な知識を得ることができ、移住問題の現在の状況を認識した。また、上司のホームパーティーなどを通じて、国際的な活動の分野での振る舞い方や感覚を身につけることができた。

４．インターン生同士の交流

同氏の住んでいたところは、IOM だけでなく、ILO（国際労働機関）、WHO（世界保健機関）の本部も歩いて 10 分ほどの距離にあり、それぞれの機関のインターン生との交流の機

会も多々あった。そのため、様々な国のインターン生とのネットワークを広げることができた。

講演者：牛島 千晶氏
派遣期間：2010 年 5 月～8 月 16 日、10 月 11 日～10 月 29 日
派遣先：国際連合ジュネーブ事務局(UNOG)、国際連合人権高等弁務官事務所(OHCHR)

既存のルートを使わずに、一般的にインターンをしにくいと言われている国際連合ジュネーブ事務局へ赴いた修士課程・国際協力専攻２年の牛島千晶氏の講演は、自身が派遣された国際機関の説明に始まり、２つの機関への派遣という貴重な体験の話がなされた。また、それぞれの業務内容やインターンの成果・反省、上司・同僚とのコミュニケーションの話なども交え、インターン後の心境の変化についても語った。

1. 国際連合ジュネーブ事務局とは

スイス・ジュネーブの Palais des Nations にあり、ニューヨーク事務局に次ぐ規模を誇る。職員数は約 1600 人で、国連の管理・運営業務を担当している。牛島氏は、その中の Financial Resources Management Service という国連のファイナンスに関する業務をカバーする部署に配属された。

2. 国際連合人権高等弁務官事務所（OHCHR）とは

OHCHR は、1993 年に第 48 回国連総会決議で創設された。国連の人権担当部門であり、その業務はリサーチや分析に重きを置いている。人権享受の普遍的な促進、人権に関わる国際協力、国際的基準の普遍的実施の促進などが主な任務である。

3. ジュネーブ事務局での業務内容

Umoja Project のコーディネーターのアシスタントをした。このプロジェクトは、煩雑な国連の運営を効率のよいものにしていこうという趣旨のものである。具体的な活動内容は、プレゼンテーション用ファイルのサマリーの作成、ワークショップの日程や参加者の調整などだ。また、Trust Fund Unit という、通常予算以外の資金を扱う部署の業務も行った。具体的な活動内容は、スタンダードアグリーメントのテンプレート作成や、各国が独自に出す課題をまとめたマトリックスの作成などである。

4. OHCHR での業務内容

Millennium Development Goals Section という開発における人権の扱い、主流化を行う部署に配属された。セクションが行っているプロジェクトである“Action 2”の担当者のア

シスタントをしていた。ドナーに提出するレポートのドラフトの作成、ファイルレポートが未提出の国に対して提出を要請するオフィシャルレターのドラフトの作成などを行った。

5.　達成できたこと

事務局では、extra budgetary（通常予算以外のお金）の流れに関する理解が深まった。それとともに、国連におけるトラストファンドに関する初歩的知識を習得することができた。

OHCHR では、人権をテーマに取り組んでいる修士論文の手がかりを見いだすことができた。また、事務局とサブスタンディングオフィスの双方のインターンを経験したことで、国連という組織への理解がさらに深まった。加えて、人間関係の構築にも繋がった。

6.　達成できなかったこと

事務局では、各自に個人オフィスが与えられたため、上司やスーパーバイザー以外の職員とのコミュニケーションが十分にとることが出来なかった。また、ファイナンスに関する知識が乏しかったために、議論に参加することが困難であった。事務局運営の中でも、テクニカルかつ繊細な性質をもつファイナンスという分野は、インターンが入りにくいといえるかもいれない。

OHCHR では、業務への理解が一部にとどまり、包括的な理解ができなかった。また、ワークショップ開催時の協力体制など、サブスタンディングオフィス同士の関連性についての理解が不十分であった。

7.　職員との付き合い方

スーパーバイザーや上司を糸口にネットワークを広げていった。いろいろな方の話を伺うことは、インターンに臨む姿勢や自身のキャリアを考える上で有益である。

8.　インターン前後の心境の変化

インターン前は、国際機関など雲の上の存在であり、どんなところなのか、どんな業務をするのか、まったく想像がつかなかった。しかし、インターンを経たことで国際機関を身近に感じられるようになり、現実的な就職先のひとつとして捉えられるようになった。

9.　インターンを終えて

国際機関はエネルギーのいる場所である。自分から積極的に仕事を探していかなければならないため、インターンの目的をはっきりさせることが必要である。また、何事にも前に打って出る姿勢が大切である。国際機関で働くとはどういうことかという雰囲気をつかめたことや、国際機関を現実的な就職の選択肢に挙げられるようになったことは大きな収穫であった。

講演者：陳 穎氏
派遣期間：2010 年 7 月～12 月
派遣先：UNOCHA（国連人道問題調整事務所）

陳穎氏はニューヨークにある OCHA（国連人道問題事務所）の人間安全保障部門で半年間インターンシップを行った。同氏は担当部門での仕事を行うだけでなく、積極的に仕事を見つけ経験を積んだ。講演では OCHA やインターンの説明だけでなく、ニューヨークでの生活や課外活動なども報告した。また同氏は修士論文でのテーマに人権を掲げており、その人権についての理解を深めるためには人間安全保障がよい切り口になっていることをインターンで実感したという。

1. OCHA とは

OCHA（国連人道問題事務所）とは、世界各地の自然災害や紛争における人道支援の強化や情報の整理、NGO との連携の調整などを行う機関である。職員数はインターナショナル職員 638 人、ローカル/ナショナル職員 1208 人。同機関の代表は、2010 年に John Holmes 氏から Valerie Amos 氏に交代した。事務所は世界各地にある。

2. 取り組んだ業務内容

日本がその 90%を出資する信託基金の管理や、国連の活動の中の人間安全保障を担当する人間安全保障部門で働き、フィナンシャルオフィサーや基金を管理するプログラムオフィサーをサポートした。また、新しいデータベースを作り、プロジェクトのレポート作成やコンセプトの見直しを行った。部署の行政担当者のサポートをはじめ、部署でのあらゆる仕事をこなした。

3. 達成できたこと

国連がどのように運営されているのかを理解することが出来た。また、人間安全保障の概念を学び、そこへのアプローチ方法に関する知識を得た。自分の言葉であらゆることを説明しなければならないため、コミュニケーション能力や語学力があがった。上司や関係者と人間関係のネットワークを築き上げたことによって、国連機関での就職情報を得ることができた。

4. その他の活動

観光やハイキング、パーティーなどのインターン生によるイベントに参加したり、国連のチャイニーズデイや人権に関する学生会議などの国連が主催するイベントのボランティ

アに参加したりした。

5.　ニューヨークでの暮らし

食費は月に 100 ドル～300 ドルかかった。移動手段は地下鉄やバスであった。住まいはセントラルパークに近いスパニッシュハーレムのアパートで、日本人が管理人であった。

田中 大一氏

派遣先：国連教育科学文化機関(UNESCO)

１．UNESCO とは

UNESCO とは、教育、科学、文化における国際協力を通じて世界の平和と人類の福祉に貢献する国際機関である。同機関はさまざまな国際的民間団体によって支えられている。1996-1997 年事業計画からは、女性・青年・LDC 諸国・アフリカの４つの分野を重点分野としており、地域別ではアフリカ等に重点を置いている。

日本は UNESCO 加盟の 1952 年以来連続して執行委員国を務めており、第 2 位の分担金の負担率は全体の 7%である。

２．取り組んだ業務内容

リーマンショックが途上国 12 か国にどのような影響を及ぼしたか分析する RIVAF(Rapid Impact and Vulnerability Analysis Fund)プロジェクトにおいて、GMR を用いて 2001 年から 2010 年の国内の教育、経済、社会などの様子の要約やインターネットを用いたデータ入力ソフトの準備、また、対象国のプロポーザルの印刷やナショナルチーム決定会議への参加、対象国の人たちと情報交換などを行った。他には、作図やデータ入力などの補佐作業も行った。また、UNESCO の内向的状況を打破するため、インターン生でありながらウィークリーニューズレターを作成し、外への発信を自ら試みた。

３．達成できたこと

会議やセレモニー、パーティーなど、身の周りの環境や状況がなんのために行われているのかを意識して理解することや、英語・仏語の向上、修士研究の資料収集、また、日本人スタッフ、政府代表部、ユネスコ外の日本人を含めた多くの人の話を聞くことができた。

４．達成できなかったこと

国際機関に入るための具体的な方法を聞くことと、修士論文の執筆ができなかった。

５．インターン前後の心境の変化

自分の弱点・補強点が把握できたため、国際機関に就職する可能性が高まった。国際機関の福利厚生や給与は魅力的であり、刺激的で興味深い人が多いということも発見できた。また、自信と度胸がついた。

６．今後の進路について

民間企業でヒト・モノ・カネの流れの把握や共同作業の要領をつかみ、広い視野を持ちながら実地経験を積む。また、社内制度を利用しての海外派遣によって、言語スキルを向上させることも考えている。

７．生活全般について

日本人家族の一部屋を借りていたので家賃は 350€/月と安く、食費は自炊で 300€/月であった。月に 2･3 回、エシャンジュという仏人との交流会に行き言語スキルを高めた。また、毎週末イベントやパーティー、スポーツ観戦や美術館めぐりなどに参加した。

講演者：楊 殿閣氏

派遣期間：2010 年 8 月 9 日～2011 年 1 月 28 日

派遣先：ユネスコ北京事務所

ユネスコ北京事務所へのインターンシップを利用した国際社会学科の博士後期課程 2 年、楊殿閣氏の講演では、冒頭に組織の構図、業務の説明が行われ、その後自身のインターンシップを通じて得た情報、経験、今後の進路の話がなされた。また、単なる報告に終始することなく、インターンシップを終えての自己評価を行い、達成できたこと、できなかったこと、心境の変化、そして今後の進路をどうしていくつもりなのかを具体的に話した。同氏はユネスコ北京事務所に派遣されたことで、中国社会と日本社会の今を見つめることができたと語っていた。

1.　ユネスコ北京事務所とは

ユネスコ北京事務所は、教育・科学・文化における国際協力を通じて世界の平和と人類の福祉に貢献する国際機関である UNESCO の地域事務所であり、中国、モンゴル、北朝鮮、韓国、日本を主な管轄としている。行政、自然科学、文化、情報、社会科学、そして教育に関する部署がある。事務所は、主に中国人からなるインターナショナル・スタッフ 7 人、ナショナルスタッフ 18 人、各国からのインターン 6 人で構成されている。

2.　取り組んだ業務内容

大きく分けて 6 つの業務に取り組んだ。１つ目は、政府が公布した教育政策の教育セク

ションへのブリーフィング、２つ目は東アジアにおける教育システムの比較分析、３つ目はスーパーバイザーのプレゼンテーションやスピーチのアシスタント、４つ目は事務所が必要とする教育にかかわるドキュメントや記事などの収集、５つ目は教育セクションのワークショップやセミナー等のアシスタント、６つ目はスーパーバイザーの臨時的な補助業務であった。

3.　達成できたこと

１つ目は、中国語の資料収集・ブリーフィングを多く行うことができたことである。２つ目は、日本と中国の高等教育に関する分析をすることができたことである。また、自身の中国語を活かして現地のナショナルスタッフとコミュニケーションをとり、その中で有益な情報を豊富に得ることができた。

4.　私生活の中での取り組み

近年変化が激しいとされる北京の街で、政治を担う知識人、経済や文化、生活を担う一般大衆や出稼ぎ労働者など様々な階級の人々と接触し、それぞれの話を聞くことができた。

5.　インターン前後の心境の変化

UNESCO の業務は政策レベルの計画、調整が中心であるという点で、現地での仕事が多い UNICEF と異なっていると考えるようになった。また、中国社会の中心である今の北京を再認識することができた。海外に出て改めて日本を知ることで日本社会における自分自身を見つめることができた。

6.　今後の進路について

教育か、もしくは中国についての専門性をより磨き、語学力、特に書く力を強化する予定である。国際機関ではすぐに使える人材を求めているため、国際協力活動に参加する、日本の民間企業に就職するなどして職業経験を積むことを考えている。

国際機関でのインターンシップを終えた先輩方は、それぞれの機関をより身近に感じることができたと語っていた。この講演を通じて、学生たちは国際機関の業務をより具体的に知ることができ、彼らの興味は強く刺激されたであろう。